**降誕節第3主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年1月14日**

**「祈りの人」**

**詩編5編2～4節**

 **5:2 主よ、わたしの言葉に耳を傾け／つぶやきを聞き分けてください。**

 **5:3 わたしの王、わたしの神よ／助けを求めて叫ぶ声を聞いてください。あなたに向かって祈ります。**

 **5:4 主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て／あなたを仰ぎ望みます。**

**使徒言行録10章1～8節**

**10:1 さて、カイサリアにコルネリウスという人がいた。「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で、**

 **10:2 信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた。**

 **10:3 ある日の午後三時ごろ、コルネリウスは、神の天使が入って来て「コルネリウス」と呼びかけるのを、幻ではっきりと見た。**

 **10:4 彼は天使を見つめていたが、怖くなって、「主よ、何でしょうか」と言った。すると、天使は言った。「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。**

 **10:5 今、ヤッファへ人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。**

 **10:6 その人は、革なめし職人シモンという人の客になっている。シモンの家は海岸にある。」**

 **10:7 天使がこう話して立ち去ると、コルネリウスは二人の召し使いと、側近の部下で信仰心のあつい一人の兵士とを呼び、**

 **10:8 すべてのことを話してヤッファに送った。**

　**一人の人がイエス様の十字架と復活の福音に出会い、救われていく、その出来事に立ち会うことは、何か自分も救いの恵みに預かるようでとても嬉しいことです。神様がその人を愛して下さり、捕らえて下さり、神様の大きな御業が今まさになされている、私たちの思いをはるかに超えた神様の大きな愛の業がなされていることを体験することは大きな恵みなのです。**

**カイサリアに住むコルネリウスの物語が始まりました。神様がユダヤ人ではない異邦人コルネリウスを愛して下さり、捕らえて下さり、イエス・キリストの十字架と復活の福音に出会わせ、救いへと導いて下さる。しかもコルネリウス一人だけではなくて彼の親類や親しい友人も一緒に、彼ら一同の上に聖霊が降り、洗礼へと導かれていく、その大きな喜びの物語が始まったのです。**

**いわゆる「コルネリウスの回心」と呼ばれているこの救いの物語は10：1から11：18まで続く非常に長い物語です。一人の異邦人とその仲間の救いが非常に丁寧に描かれているのです。なぜここまで非常に丁寧に描かれているかというと、異邦人コルネリウスの救いの出来事というのが、それまでユダヤ人伝道が中心だったキリスト教会が神様の導きによって異邦人伝道を中心にしていくことになるのです。福音がエルサレムのユダヤ人から世界中のあらゆる人々に、地の果てに至るまで福音があまねく広がっていく、キリスト教会にとってその非常に大きな転換点を迎えた出来事なので非常に丁寧に描かれているのです。そして、それはこのコルネリウスの救いの物語を共に読む私たちも救いの場に立ち会うのです。決して他人ごとではない、同じ教会で洗礼を受ける兄弟姉妹の洗礼式に立ち会い、救われた証しを聞いているかのように、私たちもその神様の大きな恵みをいただくのです。神様の大きな愛の御業を共に味わっていきましょう。**

**「さて、カイサリアにコルネリウスという人がいた。「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で、**

 **信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた。」10章の1・2節にコルネリウスという人がどういう人であるのかが記されています。彼はローマ人であってユダヤ人ではありませんし、割礼を受けていませんのでユダヤ教徒とは言えませんが、天地を造られた神様を熱心に信じて、多くの施しを、絶えず神様に祈る祈りの人であるのです。**

**そんなコルネリウスのもとに神様の天使が現われます。時間は午後3時です。午後3時というのはユダヤ人にとって祈りの時間です。午前9時、昼の12時そして午後3時とユダヤ人は1日3回の祈りを大切にしているのです。神様を信じる祈りの人コルネリウスも午後3時に祈っていたのです。祈るコルネリウスのもとに天使が現われます。コルネリウスは答えます「主よ、何でしょうか」。すると天使は言います。「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。ヤッファに人を送ってペトロを招きなさい」コルネリウスは天使のこの言葉に従って二人の召し使いと信仰心あつい一人の兵士を呼んでヤッファにいるペトロのもとに遣わしたのです。**

**会ったこともなければ、恐らく名前も知らないペトロの所に部下を遣わして自分の家に招くのです。コルネリウスはその目的も知らされていません。何のために招くのかも知らされていないのです。それでもコルネリウスは天使の言葉、さらに言えば神様の言葉を信じて信頼してペトロのもとに部下を遣わすのです。なぜそこまで神様を信頼できたのか、それはやはりコルネリウスが熱心に絶えず祈る祈りの人であったからだと思うのです。**

**「絶えず神に祈っていた」2節の終わりにこのように記されています。コルネリウスは日頃からどのような祈りをしていたのだろうか、どんな祈りをいつもしていたのだろうかと思いを巡らしていました。**

**今日の旧約聖書の詩編5編2～4節は祈りの言葉です。**

**「5:2 主よ、わたしの言葉に耳を傾け／つぶやきを聞き分けてください。**

 **5:3 わたしの王、わたしの神よ／助けを求めて叫ぶ声を聞いてください。あなたに向かって祈ります。**

 **5:4 主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て／あなたを仰ぎ望みます。」**

**1節にダビデの詩とありますので、ダビデが神様に向かって私の助け求めるその叫びを聞いてください、私の声を聞いてくださいと必死に祈るその祈りの言葉です。**

**100人隊長のコルネリウスです。民に多くの施しをしたと記されていますので、自分が任せられているユダヤ人の民の中の貧しい人たちに親切に愛の業を行っていました。その愛する民のために、彼らの悩み苦しみを聞いてください、彼らの叫びを聞いてくださいと熱心に執り成しの祈りをしていた。声を絞り出すように必死に思いをぶつけ願いをぶつけていた。そのような祈りの姿が浮かびました。もちろん、愛する民のためにそのように熱心に祈ることがあったでしょう。**

**けれども普段のコルネリウスの祈りはそうではないのではないかな、聖書を読んでいてそのように思わせられたのです。それは、コルネリウスが午後3時の祈りの時に天使が現われ、彼は天使を見つめて怖くなってこのように答えています。「主よ、何でしょうか」（4節）私はこの答えの言葉、さらに言えば祈りの言葉こそが、彼のいつもの祈りではないかと思ったのです。「主よ、何でしょうか」**

**普通であれば怖くなって相手が誰だかわからなければ「あなたは誰ですか？」と答えると思うのです。それをコルネリウスははっきりと「主よ」と呼び掛けています。「主よ、何ですか。私に何か御用ですか。何なりとお話しください」何かそのような祈りに思えるのです。そしてこのコルネリウスの「主よ、何でしょうか」の問であり、祈りの言葉を考えていたらある祈りの言葉に似ていることに気づかされたのです。**

**それは旧約聖書のサムエル記上3：10に記されている少年サムエルの祈りです(432頁)。**

**「サムエルよ」と呼びかけられた神様に対して少年サムエルは答えます。「どうぞお話しください。僕は聞いております」このサムエルの神様への祈りの言葉に似ていると思ったのです。**

**コルネリウスの「主よ、何でしょうか」の祈りの言葉は、少年サムエルの「どうぞお話しください。僕は聞いております」この祈りの言葉に通じるものがあると思いました。「主よ何でしょうか。主よ何なりとお話しください。僕は聞いていますので私に何なりとお話しください。」この祈りというのは「主よ、あなたの御心が行われますように」という神様の御心を求めて祈る祈りということができるのです。「僕は聞いていますので、あなたの御心をお語りください。私はあなたの言葉に従います。あなたの御心に従います」という大きな信頼の祈りの言葉なのです。**

**そして、私は「主よ、何でしょうか。」「主よ、どうぞお話しください。僕は聞いております」この祈りこそがコルネリウスが常日頃祈っている祈りではないかと思いました。それは常に主の御心を求めて主の御心が行われますようにと祈っているからこそ、心を静めて落ち着いていざ天使が目の前に現れたときも慌ててあなたは誰ですかと問いただすのではなくて、「主よ、何ですか」といつものように御心を求めて祈る祈りをなすことができたのではないかと思うのです。「どうぞお話しください。僕は聞いております」常日頃から心を静め沈黙のうちに主の御心を求めて、主が語られるのを待って祈っている。じっと耳を傾けて主の御心を求める祈りをしていたからこそ、天使を通して語られる神様の言葉にどこまでも信頼してすぐに従うことができたと思うのです。**

**心を静めて主の御心を求めて祈ること、主が語られる言葉に心静かに耳を傾けることこのことは私たちにとってもとても大切なことです。「主よ、何でしょうか。」「主よ、どうぞお話しください。僕は聞いております」私たちは普段神様に対してあまりにも自分の願いや思いをしゃべりすぎなのかもしれません。「神様、あれをして下さい。これをして下さい」とあたかも神様が自分の思い通りに動いてくれる都合の良い存在としているのかもしれません。なんでも願い事を聞いてくれるドラえもんのように神様に願いばかりをぶつけているのではないでしょうか。**

**「主よ、何でしょうか。」「主よ、どうぞお話しください。僕は聞いております」私たちもコルネリウスのように常日頃神様の御声を心を静めて聞いていきたいのです。沈黙のうちに主の御心を求めて、主が語られるのを待つ祈りの人でありたいと思うのです。御心が行われますように。**